

Emberiza グループについて

中村浩志（信州大学教育学部）

Emberiza とは、ホオジロ、アオジなどのホオジロ科の鳥のことである。当時信州大学医学部第2解剖学教室の講師であった故中村登流氏を中心に1968年に結成され、以後1971年までのほぼ4年間にわたり、日本に生息するEmberizaの鳥の共同研究を強烈に推し進めたグループである。このグループが誕生するベースには、信州生態研究会の存在があった。信州大学教育学部生態研究室の故羽田健三氏は、カモの研究で京都大学から学位を取得後、研究室の学生に一人ずつ1種類の鳥を決め、卒論研究として各種の鳥の繁殖生態の研究を行っていた。研究成果は、年1回開かれる信州生態研究会で発表されていた。この研究発表会は、鳥以外の動物、さらに植物も含め、長野県で動植物の生態研究を行っている人が年1回集まり、研究成果を発表する場であった。この発表会には、鳥の卒論研究を行い、その後長野県下の小・中学校の先生となり、卒業後も鳥の研究を続けている卒業生も多く参加していた。

長年にわたり鳥の研究を続けていると、この研究発表会で発表するだけでは物足りないと感じ、さらに鳥の研究を深めたいという卒業生が現れ始めた。中村登流氏とそのような卒業生が集まって結成されたのが、Emberizaグループである。中村登流氏は、霧ヶ峰でコジュリンの調査を長年続けていた。山岸哲氏は、長野市郊外の小田切でホオジロの研究を1965年より開始しており、須山オ二氏は松本市郊外のケイト山山麓でノジコ、アオジの研究を実施し、牛山英彦氏は霧ヶ峰で中村登流氏と共にホオアカの研究を行っていた。さらに、卒業生ではないが民間の会社に勤め、長野市郊外の飯綱高原でホオアカ、ノジコ、アオジ、ホオジロを調査していた飯島一良氏も加わり、1968年にEmberizaグループが発足し、1月に「EMBERIZA」の第1巻1号が発刊された。

このグループは何を目指すのかについては、中村登流氏が第1巻1号の冒頭で書いている。比較生活史といっても、各種の1腹卵数、抱卵日数、抱卵や育雛行動を比較しても、違うとか同じとか言えるだけである。各種の存在は、地域個体群(local population)に始まるので、まずそれを研究の対象とし、生活様式の種内における幅の広がりをとらえることがまず必要である。そのためには、

1つの種のlocal populationの1つを選んでその特性を掘り下げること、また同種の十分に別のものと考えられるlocal population（高密度の個体群や低密度の個体群など）を選んで、特性の違いを掘り下げてみる方向が考えられる。Emberizaを対象に、そのような研究を実施し、Emberizaの共通性や各種ごとの特性を生活史全体にわたる比較研究から明らかにすることを旨とするというものであった。

調査は、各自がそれぞれの調査地で実施する調査の他に共同調査を実施する。初年度には6月上旬に飯綱合宿、下旬には北海道石狩平野に出かけての合宿、11月には松本市郊外崖の湯合宿でのカシラダカ、ホオジロ、ミヤマホオジロの越冬個体群の共同調査が実施された。また、5月から8月の繁殖時期を除き、月1回ないし2回の例会が開かれた。この年には、「EMBERIZA」第1巻の1号から4号が発行されている。各号には、共同調査結果のまとめ、各自の調査結果の報告、さらに文献紹介等が掲載されている。いずれも中村登流氏による手書きのガリ版印刷であった。この年の合宿調査結果は、「泥炭地草原におけるホオジロ属の生活場所と行動圏の比較調査」(1968. 山階鳥研報5)として発表された。

翌1969年には、県外合宿として正月に印旛沼合宿が行われ、1月末には第2回崖の湯合宿が行われた。この年からはスズメを研究している佐野昌男氏、セッカを研究している母袋卓也氏などEmberiza以外の鳥を研究している人、さらに生態研究室の学生も加わり、メンバーは15名ほどになった。当時大学3年生でカワラヒワの研究をしていた私もこの年から加わり、合宿や例会に参加した。調査方法や結果のまとめ方、各種の行動圏の内部構造などが例会や合宿で活発に論議され、それらの結果がこの年の「EMBERIZA」第2巻1号から4号に収録されている。山岸哲氏は、この年から調査地を千曲川に移し、千曲川でのホオジロ調査を開始している。この年の印旛沼合宿調査結果は、「ホオジロ属5種の越冬生態」(1969. 山階鳥研報5)に発表された。

3年目の1970年には、正月の大阪箕面合宿、2月の第3回崖の湯合宿、5月のケイト山合宿、6月の志賀高原でのクロジ合宿が行われている。さら

に、8月には故浦本昌紀氏を中心にした鳥類生態グループと菅平高原で「鳥の社会とは何か」をテーマとした合同セミナーが開かれた。このセミナーは、鳥類生態グループが次の年の1971年に同じテーマのシンポジウムを開くにあたり、その準備としていくつかの種またはグループに限って、その社会を論じてみようと思われたものである。鳥の個体群の中に組織化された社会的構造を見出し、それを種ごとに比較してみようという試みであった。この年の第3巻4号には、このセミナーで発表したメンバーが、それぞれの種についてまとめたものが掲載されている。

4年目の1971年の正月には、アオジやノジコの越冬生態を調査する佐賀合宿が行われた。さらに6月には、佐賀県と長崎県での北九州調査が実施された。両地域でミヤマホオジロが繁殖しているという情報をもとに実施したものであるが、生息は確認できなかった。8月には、諏訪湖の渋のエゴでオオヨシキリとコヨシキリ、ヒクイナとバンの住み分けをみるための合宿が行われた。エンペリザ以外の鳥を対象とした初めての合宿であったが、この合宿がグループの最後の合宿となった。

この年の10月に犬山にある京都大学霊長類研究所・モンキーセンターで鳥類生態グループ主催の「鳥の社会とは何か」をテーマにしたシンポジウムが開催された。最初に浦本昌紀氏が基調講演で、今回のシンポジウムで「鳥の社会」という言葉で何を指そうとしているのかについて述べている。鳥は、具体的には個々の種の地域個体群として存在する。その地域個体群の中の個々の個体は、同じ地域に生息する異なる種の個体との関係とは異なる、空間的關係(テリトリー、群)、優劣關係(順位)、親子關係(家族)、雌雄關係(婚姻様式)などをもっている。それら同種個体の關係を社会としてとらえ、同じ種に属する地域個体群で比較してみると、そこには共通する点があるので、種ごとの社会というものの抽象できる。それらを「種社会」という見地から捉えて比較検討することは、これまで行われて来なかったもので、意識的にそこに集中してみることに今回のシンポジウムの意義があるとしている。その後、Emberiza グループの

メンバー以外に斉藤隆史氏のジジュウカラ、久保浩洋氏のカササギ、山田拓氏のコガラ、西田智氏のツルの発表を加え、計9の発表が行われた。最後に「冬における鳥の存在の仕方」というテーマで総合討論が行われ、冬(非繁殖期)のあり方と繁殖期の構造との関連性の重要性が論議された。このシンポジウムが行われた時期の「鳥類生態グループ会報」第15号に掲載された会員数は、計61名に及ぶ。当時の鳥学会の多くの人が会員となっていたことがわかる。

しかし、第1回シンポジウムと位置付けられた鳥の社会のシンポジウムは、その後第2回目が開催されることはなかった。また、「EMBERIZA」は、この年の第4巻2号を最後に、その後は発行されなかった。中村登流氏は、この年にエナガの研究で学位を取得され、信州大学教育学部の志賀施設に助教授として赴任された。山岸哲氏も同施設に勤めることになり、ホオジロの学位論文のまとめに忙しくなり、Emberiza グループはその後自然消滅することとなった。Emberiza グループは、私にとっての大学院であったと後に山岸氏は回顧している。私にとっても大学の後半はこのグループの活動から多くのことを学び、その後鳥の研究を目指すことにつながった。

Emberiza グループと鳥類生態グループとは、ほぼ同じ時期に誕生し、ともに1971年の「鳥の社会とは何か」のシンポジウムを最後に活動がほぼ停止している。前者のグループは中村氏を中心に長野県で、後者は浦本氏を中心に東京から全国組織に広がったが、主な活動期間はともにほぼこの5年間に集中している。中村氏と浦本氏の良い関係が2つの組織を共に発展させ、日本の鳥学に鳥の社会という言葉で集約される特異な時代を画したといつてよいであろう。この活動を通し、多くの鳥の研究者が育った。個体群生態学が盛んな時期であり、行動生態学が日本に広まる前の時代である。日本鳥学会の会員には、現在鳥の生態を研究する人が多いのは、この特異な時代の強いインパクトがその後も影響しているのではないかとと思われる。